

あとがき

わたしは一介のスペイン文学研究者であり、元来、スペイン史には疎かった。それがスペイン史の大家である、アメリカ・カストロに関心をもち、その主要作品を翻訳するなかで、次第に文学を理解するために、歴史の知識が不可欠であることを知った。学生時代から、わたしにとってスペイン文学の最高峰は、セルバンテスの『ドン・キホーテ』であり、カストロはあくまでも『セルバンテスの思想』の著者であって、この書は『ドン・キホーテ』論の「アルファーにしてオメガ」であった。そのなかにこそ、セルバンテスの知の全てがあるという信念があった。ところが大学卒業後のスペイン留学を機に、カストロの他の著作を読むにつれ、次第に彼のスペイン史理解のなかで、セルバンテスのみならず、い

わゆるスペイン黄金世紀文学の綺羅星たる大作家たち（最初にセルバンテスとの関連で関心をもったのが、トレード詩人のガルシラーソ・デ・ラ・ベーガであった）が、生きた存在としての意味を獲得していった。スペイン古典文学という、日頃の日常生活とは全く無縁の、学問研究上の分野が、俄然、人生における意味をもってきたと言つてもいい。つまりカストロの視点を通して、今まで単なる知識としてしかなかった古典作家たちが、血の通つた生きた存在として蘇つた、というような思ひであつた。彼らが各々、自らの置かれた困難な状況のなかで、生き抜いていった足跡を、作品を通して追体験することで、人間に普遍的な体験を共有することができたように思えたのである。つまり文学的経験が、生活の不可欠な一部として存在しうることを知つたのである。

これはカストロが、歴史と文学を厳格に分けることをせず、ともに人間の生のありようを描くものとして、両者を一体的に捉えたことによるものであつた。歴史は厳密科学ではなく、生きた人間を映し出す文学であるという姿勢こそ、カストロの基本的スタンスであつた。そこには作家的な、小説的想像力が不可欠であつた。生の実相をどのように描くか、という一点において、言語、年代記、文学、伝説、民俗、格言、ことわざ、挿話、その他あらゆる人間的な表象を活用することに何の躊躇もなかつた。ただ抽象的な思想やイデオロギーという型にはまつたものを、カテゴリーとしてそこに当てはめることだけは決して容認しなかつた。カストロ流の表現を用いれば、純粹な思想としてのエラスムス主義がスペインに根付くことはなかつたが、人間としてのエラスムス主義者は存在した。つまり、エラスムスが追求した理想に共鳴し、それを武器として自らを救い出そうとした人間たちがいたということである。エ

ラスムス主義が異端視されて排除されたのは、それが所詮、外来の、輸入された思想であって土着のものではなかったからである。スペインにとって土着的なもの、つまり、スペインの歴史的现实に根ざしたもののしか永続性はなかった。それが何であつたのかを深く探ることが、カストロ史学の究極の目的であつた。

カストロが生涯の課題として取り組んできたのは、真に（スペイン的なるものとは何か）（われわれスペイン人とは何者か）という問題である。そのためにスペイン性を意味する（エスパニョール）という言葉そのものの起源を問題にしたが、一部の学者（たとえばR・ラペーサ）を除いて、誰も問題にしなかつた。それは大多数の人々が、スペイン的なるものなど、改めて問いたすまでもないと考え、最初の時代から、スペイン人は未来永劫、変らぬ普遍的な資質として存在しているという、国民神話（永遠のスペイン人、ホモ・ヒスパヌス）に、小さいころから慣れ親しみ、凝り固まっていたからである。

それに正に蠅螂の斧のごとく、ペンひとつで独り立ち向かつたのがアメリカ・カストロであつた。スペイン語、スペイン人を表わす（エスパニョール）の起源がプロヴァンス語にあり、本来のスペインにはなかつたという事実は、スペイン人にはまさに晴天の霹靂であり、何のことかさっぱり意味がつかめなかつた。つまり、当時、レコンキスタの趨勢が決し、イスラム勢力が弱体化した十二、十三世紀に、スペイン人と称される人々は未だに実体として存在していなかつたということなど、思いもよらぬことだつたのである。彼らがどういふ存在であつたのかといえ、単にイスラム教徒と戦つたキリスト教徒のカステイリヤ人、アラゴン人、ガリシア人、ナバーラ人などであつたにすぎない。つまり各々

がイスラム教徒の対抗勢力として、複数のキリスト教王国として分立していたのである。このことは十二世紀のスペイン文学最古の叙事詩『わがシッドの歌』や、十三世紀に『聖人伝』を書いたベルセオが裏書きしていることで、決してカストロの単なる思いつき、想像の産物ではない。こうした作品には、当時の人々の歴史的ありようが、実体として映し出されている。これこそが歴史的現実であって、カストロが真に追求めようとしていたものであった。

カストロ史学の中心概念である〈生の住処〉や〈生き様〉は、そうした歴史的現実の背後にあって、いかなる個人や民族にも存在している。ただその存在に気づくかどうかが問題である。これは生に関わる実存的な概念で、目に見えるものではない。つまり偏に想像力のなかにあるのであって、それを感じ取るには文学的センスが必要である。カストロに反対する人々は、こうした概念こそ抽象的であり、資料的根拠がないとして、全面的に否定する。最初から取り合おうとしないのである。しかしそうした人々ですら、歴史を生きた人々の生の有り様を探ることの重要性を認めないわけではない。ただ、歴史（物語）をひたすら科学の枠や、抽象的概念に嵌め込もうとして、先験的（ア・プリオリ）なかたちで問題を設定し、すでに予定された既定の結論に導こうとするのである。たとえば、既存の文学史や歴史書の記述に従って、ガルシラーソの詩はルネサンス的だとか、ゴンゴラやケペードの詩はバロック的だとか、『ドン・キホーテ』は単なる滑稽小説だとか、マテオ・アレマンのピカレスク小説は対抗宗教改革の産物だとして簡単に片付けてしまう態度もそうであれば、あるいは、十六世紀初頭に、カステイリーヤ諸都市において起きたコムネーロスの乱を、王権と抑圧された市民の間の最初の市民革命だとか、

民主主義の萌芽などと規定して、極めて複雑な人間の事象を、すでにある範疇に嵌め込んで、理解したつもりになるというのもそうした思考法である。資料やデータをいくら積み上げても、皇帝に刃向かったコムネーロスの兄をもったガルシラーソの詩そのものを読まなければ、古典的にして近代的な、そして極めて実存的な自由への熱望や苦悩、肉親への思いやりと失望という、極めて人間的側面を感じ取ることはできない。それは彼を取り巻く宮廷というものの存在の意味と、好むと好まざるとにかかわらず、その窮屈な環境のなかで生きることを余儀なくされた人間の生の声を、ひとつの様式である（ヘルネサンス的）な詩の背後から感じ取らねば、とうていなしえないことである。つまりガルシラーソの（生の住処）と、その機能である（生き様）に、文学的にアプローチする以外に方法はない。かのトレード詩人がなぜ、主君たる皇帝カルロス五世の理解し得ぬラテン詩（『オード三』）で、彼の残酷さをなじるような詩を書いて、内なる反逆を試みたのか、また牧歌という伝統的・古典的な詩型で、自らの挫折した愛の苦悩と、自らを救ってくれた刎頭の友たる第三代アルバ侯爵ドン・フェルナンド・アルバレス・デ・トレードとの友情を描かねばならなかったのか（『牧歌三』）、そうした部分を知ったとき、初めて筆者にはガルシラーソという人物が、文学史のなかの味気ない存在から、われわれと同じ血肉をもった人間、普遍的な人間的価値をもった存在へ変容していった。旧キリスト教徒で、高貴な血筋の詩人であったガルシラーソの反逆の姿勢は、カストロの説くような、スペイン史を彩る、新キリスト教徒（コンベルソ）たちが抱いた反体制的意識や、異端審問に反対する反権力的なそれ（コムネーロスの乱はそこに根本的な原因があった）とも一線を描すが、それでも共通しているのは、血統の善し悪しとは無縁な、